

太平洋戦争終結までの新聞製作技術

その2 活字

1870年(明3) 12月8日(旧暦)、初の日本語の日刊紙である横浜毎日新聞が創刊された。この新聞の創刊時は木活字だった。72年2月(旧暦)、毎日(東京)の前身である東京日日が創刊された。『毎日新聞百年史』によると、創刊号は木版、2号から11号までは鉛活字、12号から117号は木版に戻り、118号から303号までは木活字、そして304号からようやく鉛の活字の使用を再開している。これは当時の新聞社がまだ鉛の活字を十分に用意できていないことを示している。新聞社は活字を活字業者から購入した。今回は活字サイズの変遷について説明する。

初期の活字サイズは10.5ポイント相当

明治の初めに相次いで創刊された新聞の基本活字は本木昌造が定めた5号活字だった。これは10.5ポイント(P)に相当する。1Pは13.84ミルス(1ミルス=1/1000インチ)。この活字が明治の末期頃まで、長い間使われた。なお、この5号というのはポイントのように絶対的な大きさを表すものではない。したがって活字業者の間で微妙にサイズが異なっていたようだ。5号より少し小さい6号(5号の3/4)も記事量の増加につれて、一部で使用された。

使用開始年月	活字サイズ	段数	字詰
1905(明38)年1月		7	19
1909(明42)年5月		8	18
1914(大3)年3月	9P	9	17
1917(大6)年8月	8.5P	10	16
1918(大7)年7月	8P	11	15
1919(大8)年1月	7.75P	12	↓
1921(大10)年7月	7.5P	↓	↓
1928(昭3)年4月	7P	13	↓
1937(昭12)年8月	約6.7P	14	↓
1940(昭15)年1月	約6.3P	15	↓
1941(昭16)年12月	約6.3P扁平	↓	↓
1944(昭19)年5月	約5.9P扁平	16	↓

朝日新聞の活字サイズの変遷(1905年以降)

表は1905年以降の朝日新聞の活字サイズの変遷である。朝日と毎日活字サイズ変更を主導した。他の新聞も競争上、遅れることはあっても両社の動きに追従した。

04年(明37) 2月、日露戦争が始まった。開戦前から記事量が増え、各新聞は5号活字より小さい活字を必要とした。

その少し前の03年(明36)に大阪で開催された第5回内国勸業博覧会に東京築地活版製造所が初めて数種のポイント式活字を出展した。その10P活字は5号活字より少し小さいが、記事・広告の収容量が大きくなるので新聞社には魅力的だった。新聞で最初にポイント式活字を採用したのは中央新聞(1891年～1940年に東京で発行)で、9Pだったという。毎日は08年(明41) 11月からポイント制を導入(サイズは10P)。朝日は遅れて14年(大3) 3月から導入(サイズは9P)。

一方、東京新聞の前身の都新聞が、02年(明35) 1月に活字業者の善勝堂の協力で、5号活字より小さい、9.75P相当の都式新活字の使用を始めた。この新活字の書体は読みやすいと評判になり、他社から字母を分けてほしいという申し込みが多く、全国的に普及した(注1)。読売も都式活字を採用した。

萬朝報が扁平活字を考案

また、黒岩涙香の萬朝報(よろずちょうほう)は記事量を増やす目的で1904年(明37) 3月、正方形ではなく天地を押しつぶした扁平の活字の使用を開始した。同紙はこの新活字を20世紀式活字と呼んだ(注2)。この活字は扁平過ぎて読みにくく、翌年5月に修正を加えている。萬朝報の活字は、別名、お多福。正方形ではなく横に広がったイメージがわくネーミングだ。萬朝報の20世紀式活字は16年(大5)年9月まで使われた。

大正中期に頻繁に活字サイズ縮小

1917年(大6)から19年にかけて、活字サイズはたびたび縮小された。例えば朝日は17年(大6) 8月に8.5P、18年7月に8P、19年1月に

7.75Pと活字を小さくし、1ページの段数をそれぞれ、10段、11段、12段に増やしている。活字サイズの縮小は記事量の増加をもたらすが、同時に広告収入の増加を図るためでもあった。毎日と読売もこの時期に頻繁に活字サイズの縮小を行なっている。14年(大3)7月から18年11月まで第1次世界大戦があり、多くを輸入に頼っていたパルプが高騰。そのため、用紙価格が大幅値上げされ、新聞社の経営を圧迫した。そのため、購読料の値上げをしたが、広告収入も増やす必要があり、段数変更を行ったのだ。

しかし、頻繁に行われた活字縮小に対応する活版の現場は大変だったろう。また、経営体力の弱い地方新聞社には活字の度重なる変更は大きな負担となった。

中央の大新聞は大きな資本力にもものを言わせて新しい活字を用意し、段数を変える。新しい活字を作るためには字母を注文しなければならぬ。それにはかなりの時間的余裕が必要だし、出費も多かった。だから基本活字と段数の変更は一面において中央新聞の地方紙への圧迫も意味していた、と『河北新報七十年史』は書いている。

1段15字詰の始まり

この時期で特筆すべきは、1918年(大7)7月、1段15字詰が始まったことだ。朝日、毎日、読売が同時に1段15字にしている(各紙とも11段制)。これ以後、活字を小さくして段数を増やすことがあるが、1段15字詰は戦後の81年(昭56)まで維持された。なお、毎日は18年(大7)9月に1段16字にするが、たった4カ月で活字を縮小して1段15字に戻っている。

昭和に入り、28年(昭3)4月、朝日、毎日が7P活字を使用し13段制とした(読売は翌年6月)。この活字の寿命は長く、以後10年弱の長期間使われることになる。このことは、7P活字が新聞文字の読みやすさの限度であることを暗示している。

37年(昭12)7月に日中戦争につながる盧溝

橋事件が発生すると、王子製紙は用紙削減を新聞社に通告。これを予想して準備を進めていた朝日、毎日、読売は、同年8月、6.75P活字を使用し、14段制となった。記事・広告を増やすのが目的の今までの活字縮小とは性格が異なり、用紙の不足に対応したもの。この頃をピークに、以後、新聞は減ページに転じた。活字の改鑄に際しては、朝日は7P活字の原型をそのままとし、周囲の余白を削って、視力に影響を及ぼさないように工夫した。他の新聞も同様の努力をしたとみられる。

画期的な扁平活字

さらに、1940年(昭15)1月、朝日、毎日、読売は6.3P活字に縮小、15段制となった。ところがこの活字は小さく、用紙やインキの品質低下もあって、読みにくく視力を害すると社内外の評判がよくなかった。特に兵士の視力の観点から、軍部からクレームがあったという。新聞は以前の活字サイズに戻る寸前まで追い込まれた。

そのため、朝日は高さはそのままの87ミルスだが、幅を87ミルスから98.5ミルスに広げた扁平活字を当時の新聞連盟に提案し、試し刷りを各社に配布。41年(昭16)12月5日付朝刊から使用を開始した(注3)。毎日も同じ日から、読売は翌42年3月から使用を始めた。したがって、太平洋戦争の開戦(真珠湾攻撃)の朝日と毎日の紙面はこの扁平活字で報道されたわけだ。なお、行間のインテルの幅を小さくしたので、行数は従来とほとんど変わらない。

扁平活字は、漢字の61%が横に広がっていることが調査で分かったために考えられたもので、視覚的に7P活字と同じ効果があると認められた。ただし担当者は読者の反応を心配したが、好評にほっとしたと伝えられている。

前に述べたように扁平な活字は萬朝報が先鞭をつけている。しかし、萬朝報の場合と今回ではその目的が違う。今回は小さくし過ぎ

毎日には1941年(昭和16年) 12月5日と12月6日の2説がある。しかし、当時の紙面を見ると、大阪毎日の12月5日付朝刊に新活字使用の社告が出ている。また、東京日日(東京毎日)は12月6日付夕刊にやはり新活字使用の社告が載っている。これが6日説になったのだろう。なお、当時の夕刊は翌日の日付で発行していた。つまりこの夕刊は5日に印刷され、配られている。毎日の東京の読者は大阪より半日遅れだが、扁平活字の新聞を見ていた。面白いことに大阪と東京では書体が異なっていた(注4)。

『読売新聞社百年史』の年表に、「1940年(昭和15) 1月、扁平新活字で15段制実施」とある。新活字で15段制は間違いでないが、扁平は間違い。紙面を見ると、42年(昭和17) 3月2日付の読売朝刊に新活字使用の社告が出ている。この新活字が扁平活字を指している。読売の扁平活字の使用は42年3月からだ。

ところが一部の資料に41年(昭和16) 11月30日に扁平活字を使用、という記述があるが、ありえない。この説は何を基にしているのだろうか。

- 注1 『都新聞史』
- 注2 『印刷雑誌』 1982年4号
- 注3 『印刷雑誌』 1942年1号
- 注4 『新聞之新聞』 1941年12月6日



6.3P活字と6.3P扁平活字の比較
『印刷雑誌』1942年1号

た文字の可読性をよくするための工夫だ。新聞の扁平活字の考え方は現在に至るまで引き継がれている。

戦時下の新聞は減ページを余儀なくされ、44年(昭和19) 11月には各紙はたった2ページになった。このような用紙事情を見越して、同年5月、朝日、毎日、読売は5.9P扁平活字(縦82ミルス・横102.5ミルス)を採用し、16段制となった。この活字で終戦を迎えることになった。

この後も用紙事情のため活字サイズを小さくし段数を増やし、ついには日本新聞史で最多の18段制になるが、それは「戦後編」で説明する。



活字サイズを変更(縮小)した新聞社は使わなくなった活字をどう処分したのだろうか。面白い社告があるので紹介する。1919年(大正8) 12月に読売は「中古活字各種と付属品を売却」の社告を掲載している。ちょうど7.75Pへサイズ変更するので、使用されなくなる旧活字を買ってもらおうというものだ。この時、買い手が現れたかどうかは不明だ。

扁平活字の使用開始日
毎日、読売が扁平活字の使用を開始した日は諸説があり、頭を悩ました。